



Osaka Gakuin University Repository

Title	J.S. ミル国際貿易論における需要の弾力性 —需給論と相互需要説— J.S. Mill's Recognition of the Elasticity of Demand in Theory of International Trade
Author(s)	藤本 正富 (Masatomi Fujimoto)
Citation	大阪学院大学 経済論集 (THE OSAKA GAKUIN REVIEW OF ECONOMICS), 第 27 巻第 1-2 号 : 31-50
Issue Date	2013.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

J.S. ミル国際貿易論における需要の弾力性 －需給論と相互需要説－

藤本 正富

要 旨

多くの経済学者が現代の需要供給理論の発展、特にアルフレッド・マーシャルによって展開された理論の発展におけるJ.S.ミルの位置づけを研究してきた。一般的な見解では、ミルは同時代のイギリスの経済学者の誰よりもマーシャルの需要分析に近づいているが、クールノーやデュピュイが彼の10年前になした需要関数とその特性に関する意見ほどには至っていない。しかしながら、このような見解は、ミルが認識した需要の弾力性の意味する理論内容には明示的に言及しておらず、現代の経済理論に類似するよう見える彼の説明に言及するだけである。

本稿では、研究の範囲をミルの国際貿易理論に絞り、『経済学試論集』(1844)における関税を中心とした需要供給理論と、『経済学原理』(1848)における交易条件論である相互需要説の2つの理論について、ミルの需要の弾力性を図形的に示す。2つの理論におけるミルの需要の弾力性は、現代的な意味での需要の価格弾力性とは異なるが、ミルは、支出の変化を弾力性の判断基準とし、価格変化による需要量の変化から、「支出一定」、「支出増加」、「支出減少」という3つの弾力性を明示している。

ミルによる需要の弾力性は、現代的な意味での需要の価格弾力性とは異なっ

ているが、支出変化に基づく需要の弾力性として、貿易利益の測定や複数均衡問題などの理論的な分析に応用されているのである。

キーワード：J.S.ミル、需要の弾力性、相互需要説、需給論

JEL分類番号：B12.

I. 序論：問題の所在

J. S. ミルの価値論については、これまで多くの脈絡において研究が進められてきた。いくつか主要な研究を振り返ってみると、リカードの価値論からの継承という視点からミルの価値論の位置づけを研究したもの¹⁾、古典派経済学におけるミルの貢献を均衡論に位置づけて研究したもの²⁾、そして、ミルの市場価格論を直接的に研究したもの³⁾、などが挙げられよう。

このような従来の研究成果に対して、本稿のフレームワークはきわめて狭く、ミルの国際貿易論に限定している。その第一の理由は、ミルの国際貿易論には、需給均等説と呼ばれる需給論での議論と、バーター交易条件論である相互需要説での議論があるが、それぞれの理論において、ミルの需要の弾力性が明示されていると判断されるからである。国際貿易論においては、前者は主に関税の議論として、後者は交易条件決定論として、現れる。これらの議論の中で、ミルの把握した需要の弾力性が、分析手段として重要な位置を占めていることが、第二の理由である。

これまでのミルの価値論に関する研究の中で、特にミルの需要理論あるいは需要曲線に明確に焦点を当てた研究として、マイケル・ブラッドリーの論文

- 1) リカードからの継承とその擁護という視点から、深貝論文は、J.S. ミルの価値論がリカードの価値論をどのような意図をもち、どのように引き継いだのかを明確にしようとする。深貝保則、「J.S. ミル『経済学原理』における価値論の舞台設定」『山形大学紀要』第15巻第1号（昭和59年7月）、pp. 1-31.
- 2) 根岸論文は、「ミルは、基本的な価値法則、つまり需給の法則に基づいて古典派経済学を再構築することによって、古典派経済学の後衛の役割をうまく果たし、新古典派経済学の発展の道を整えた」ことを明確にしようとすると共に、ウィリアム・ソーントンによる不均衡経済学の萌芽にも言及している。Takashi Negishi, 'J. S. Mill and the Close of Classical Economics' *History of Economic Theory*. North Holland, 1985, pp. 155-190.
- 3) 代表的なものとして、以下の研究が挙げられる。森茂也、「ジョン・ステュアート・ミル」『イギリス価格論史－古典派需給論の形成と展開－』（東京：同文館、昭57）、pp. 330-366. 南方寛一、「J. S. ミルの『原理』における需給法則」『神戸大学 経済学研究年報』第8号（1961年）、pp. 141-201.

“John Stuart Mill’s Demand Curve,” *History of Political Economy*, Vol.21 (Spring 1989)がある。ブラッドリー論文の目的は、新古典派、特にマーシャルの需給論の発展におけるミルの位置づけを明確にすることにあった。結論としては、クールノーのマーシャルへの影響が大きかったという結論であり、イギリス経済学におけるミルの先駆性を評価するにとどまっているが、ミルの需要理論を所得効果的な需要理論と考え、ミルの需要の弾力性を所得弾力性にとらえている点にその大きな特徴があるといえよう⁴⁾。

しかしながら、その論拠としているものは、ミルの叙述を現代的なフレームワークで解釈したものであり、数式や図形を用いた分析は提示されていない。さらに問題なのは、価格と数量が対置される需要供給説とバーター交易条件論である相互需要説でのミルの叙述が、同じレベルでとらえられていることである。たとえば、ブラッドリーは、ドイツの輸出するリンネルの価格が低下するとき、「イギリスにおけるリンネルに対する需要が増加することは、ほとんど間違いのないことである。しかし、それは、低廉化に比例して増加することもあり、また低廉化よりも大きい割合をもって増加することもあり、あるいはまた低廉化よりも小さい割合をもって増加することもありうる。」⁵⁾というミルの叙述を引用する。これは、『経済学原理』第三編第18章「国際価値論」における相互需要説での説明であるが、ブラッドリーは、需給論と相互需要説の区別を明示しないまま、ミルの需要の弾力性として理解している。

ブラッドリーに先駆けて、シュンペーターは、ミルが『原理』第3版で第三編第18章「国際価値論」に付け加えた3つの新節での議論に注目し、「この章

4) Cf. Michael Bradley, “John Stuart Mill’s Demand Curve,” *History of Political Economy*, Vol.21 (Spring 1989), pp. 43-56.

5) John Stuart Mill, *Principles of Political Economy, with Some of Their Application to Social Philosophy*, Vol. III of *Collected Works of John Stuart Mill*, Book III – V and Appendices, Introduction by V. W. Bladen; Textual Editor, J. M. Robson (Toronto : University of Toronto Press ; London : Routledge & Kegan Paul, 1965), p. 606. 邦訳, 末永茂喜訳, 『経済学原理』, 第3分冊 (第8刷; 岩波文庫; 東京: 岩波書店, 昭48), p. 298.

の第 8 節におけるほど、需要の弾力性（elasticity 彼はこれを『伸縮性（extensibility）』と呼んだ）の概念の性格や用途を把握するのに接近したことはかつてなかった。」⁶⁾と評価する。ここもまた相互需要説に関連するが、シュンペーターはミルの言う伸縮性（extensibility）について、具体的には何も明示してはいない。

このような従来の研究をふまえ、本稿では、需給論と相互需要説それぞれについて、まずミルの需要の弾力性を図形的に提示する。そして、ミルが、需要の弾力性を、どのような形で、どの程度まで理解し、そして、どのように分析に應用していたのかを明らかにする。

II. ミル需給論における需要の弾力性：関税の議論

ミルが国際貿易論における需給論の枠組で需要の弾力性に言及しているのは、『経済学試論集』（1844）試論 I での関税をめぐる議論である。この試論 I で展開した議論は、『経済学原理』（1848）では、第三編第 17 章、第 18 章での国際貿易に関する議論ではなく、政府による干渉の 1 つとして、第五編第 4 章 6 「輸出関税および輸入関税が国際交換に及ぼす作用」に引用されており、関税に関するミルの主張の核を成している。

関税の効果をめぐるミルの議論は、ロバート・トレンズが貿易政策として主張した互惠主義とミルの自由貿易論との関連で重要となってくるが、本稿ではミルの需要の弾力性の把握に論点を集約することにし、詳細な検討は今後の課題として置いておく。

関税に関するミルの議論は、縦軸に価格、横軸に数量を取る需給論の枠組で

6) Schumpeter, Joseph A. *History of Economic Analysis*, 3d Printing, New York : Oxford University Press, 1959, n. 7, p. 608. 邦訳. 東畑精一・福岡正夫訳, 『経済分析の歴史（中）』（東京：岩波書店, 2006）, 注 7, p. 428.

ある。しかし、需要と供給の均衡が問題ではないため、供給についての言及はなく、関税の賦課による一国の輸出総額や輸入総額の変化が分析の対象であり、それに伴う貿易収支の変化が問題とされている。

ここでは、関税のうち、輸出税のケースを事例とし、ミルの需要の弾力性を検討していくことにする。ミルは、イギリスの輸出品であるラシャに輸出税を課した場合、ドイツのラシャに対する消費量の変化を3つに分類して、次のように説明する。

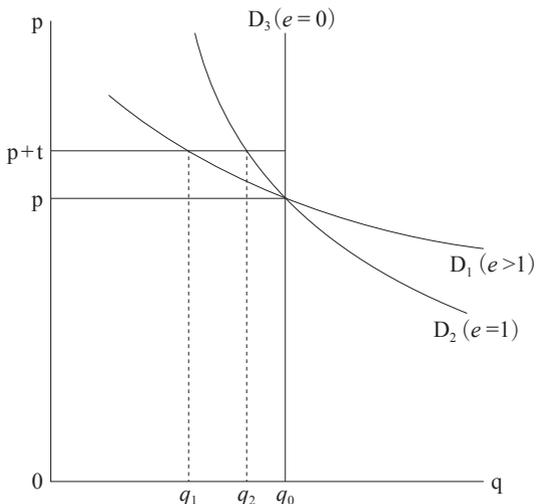
イギリスがそのラシャの輸出に租税を課すると仮定しよう。ただし、その租税はドイツに自国でラシャを生産させてしまうほどには高くないと仮定しよう。ラシャがドイツで販売される価格は租税分だけ高くなる。これは多分その消費量を減少させよう。その租税は、価格の騰貴にもかかわらず、以前ほど多くの貨幣価値を必要としない程度に消費量を減少させるかもしれない。あるいはそれは、消費される数量の貨幣価値が以前と完全に同額であるような割合で消費を減少させるかもしれない。あるいは、それは全然またはほとんど消費量を減少させないで、価格騰貴の結果として、以前よりも大きな貨幣価値を購買のために必要とさせるかもしれない⁷⁾。

ラシャが租税分だけ高くなったとき、ドイツのラシャの消費量つまり需要量は減少するという需要の法則に言及した後、ミルは支出される貨幣価値の変化を3つに分類する。すなわち、(1)以前ほど多くの貨幣価値を支出しないケー

7) John Stuart Mill, *Essays on Some Unsettled Questions of Political economy* (1844), Vol. IV of *Collected Works of John Stuart Mill, Essays on Economics and Society* by John Stuart Mill, 1824-1845, Introduction by Lord Robbins; Textual Editor, J. M. Robson (Toronto : University of Toronto Press ; London : Routledge & Kegan Paul, 1965), pp. 245-46. 邦訳、熊谷次郎・早坂忠・井上琢智訳、「経済学試論集」, 杉原四郎・山下重一(編.)『J.S.ミル初期著作集4』(東京:御茶の水書房,1997), p. 230.

ス、(2)以前と同じ貨幣価値を支出するケース、(3)以前よりも大きな貨幣価値を支出するケース、である。第1図に図示しているように、縦軸に価格 p 、横軸に数量 q をとり、輸出税を t とすれば、ロシアの価格は以前の p から $p+t$ へと上昇し、それに伴いドイツは消費量つまり需要量を減少させる。その結果生じる支出額の変化に応じた3つの需要曲線を順に整理しておく。

- (1) 以前ほど多くの貨幣価値を支出しないケースは、需要曲線 D_1 で表される。現代的な定義での需要の価格弾力性 (e) では、弾力的な需要つまり $e > 1$ に相当する。価格の上昇により、需要量は q_1 に減少し、それとともに支出も減少し、 $(p+t)q_1 < pq_0$ となる。
- (2) 以前と同じ貨幣価値を支出するケースは、需要曲線 D_2 であり、需要の価格弾力性 $e = 1$ に相当する。価格の上昇により、需要量は q_2 に減少するが、支出は $(p+t)q_1 = pq_0$ で変化しない。
- (3) 以前よりも大きな貨幣価値を支出するケースは、需要曲線 D_3 であり、価格が上昇しても需要量は q_0 のまま変化しない。つまり、 $e = 0$ であり、支出は $(p+t)q_0 > pq_0$ となり、増加する。



第1図

輸出税による支出額の変化の結果、貿易収支の均衡に変化が生じる。そして、それは金の国際移動を引き起こし、2国間の貿易収支の再調整が生じることになる。ここに上記の3つのパターンに関するミルの説明を概略しておく。

- (1) ドイツのラシャ輸入額つまりイギリスの輸出額が減少するため、イギリスでは輸入 $>$ 輸出となり、イギリス国内の金がドイツへ流出し、ドイツでの物価上昇を通じて貿易収支の均衡が調整される。
- (2) 貿易収支に変動は起こらない。
- (3) ドイツのラシャ輸入額つまりイギリスの輸出額が増加するため、イギリスでは輸入 $<$ 輸出となり、ドイツの金がイギリスに流入し、イギリスでの物価上昇を通じて貿易収支の均衡が調整される。

ミルは、関税による価格上昇に対して、需要は第1図の3つのパターンの反応を示し、貿易収支の変化は需要の反応に依存しているため、関税によって交易条件が有利化するかどうかは不確定であることを説いたのである。

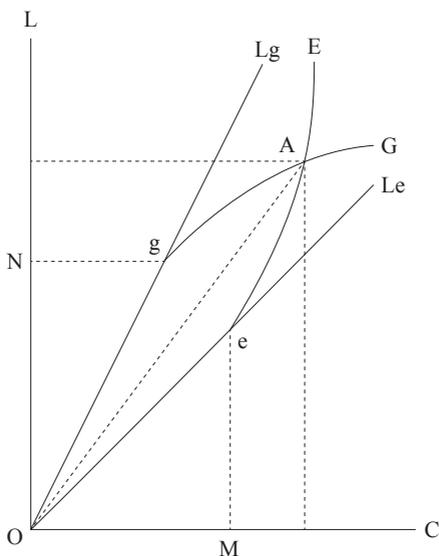
ここでの図形分析によって、ミルは、価格の上昇によって需要量が減少するという需要の法則を把握しているだけでなく、支出額の変化として需要の弾力性を把握していることが明らかとなった。ミルは、「価格変化率」と「需要量の変化率」による需要の価格弾力性を提示するには至っていないけれど、需要の価格弾力性の分析的一面である「支出額の変化」によって需要の弾力性を分類することで、分析道具としての需要理論を展開しているのである。

Ⅲ. ミル相互需要説における需要の弾力性

前章での分析により、需給論の枠組でのミルの需要の弾力性は、支出の変化に基づくものであることが確認された。本章では、もう一つの価格論である相互需要説における需要の弾力性を検討していく。

そのために、まずミルの相互需要説の基本モデルを確認しておくべきである

う。基本モデルは、イギリス、ドイツのラシャ (Cloth) とリンネル (Linen) の交易を扱う 2 国 2 財モデルである⁸⁾。第 2 図において、横軸にはイギリスによって供給されるラシャ (Cloth) の数量 C 、縦軸にはドイツによって供給されるリンネル (Linen) の数量 L を取る。ミルは、比較生産費説に基づいて、イギリスの国内交換比率 $p_e = L/C = 15/10$ 、ドイツの国内交換比率 $p_g = L/C = 20/10$ と仮定し、両国の国内交換比率の範囲内で交易条件が決定されるならば、両国共に貿易から利益を得ることを確認した後、交易条件は、価格の関数として機能する両国の需要によって決定されることを説いている。それゆえ、両国の国内交換比率の範囲内で、イギリスの需要曲線は OeE 、ドイツの需要曲線は OgG のように描くことができ、交易条件は両国の需要曲線の交点である点 A において決定される。これがミルの相互需要曲線の基本モデルである。

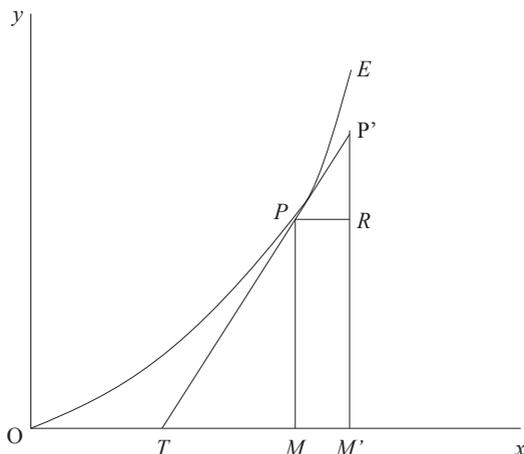


第 2 図

8) Cloth と Linen は、それぞれ服地と亜麻布と翻訳されていることもあるが、本稿では、末永茂喜訳の岩波文庫版『経済学原理』に従い、ラシャとリンネルの翻訳をあてる。

この基本モデルにおける需要曲線は、需要の価格弾力性が1より大きい、弾力的なケースである。相互需要説における需要の価格弾力性は、需要量の変化率を実物での相対価格の変化率で除したものであり、マーシャルによって図形的に提示されている。ミルの需要の弾力性の概念と比較するためにも、ここでマーシャルによる需要の価格弾力性を確認しておくことにする。

第3図において、Tは点Pでの接線がOxと交わる点であり、点Pにおける需要曲線の価格弾力性eが OM/OT で示されることをマーシャルは図形的に証明しようとする。以下、マーシャルの証明の概要を整理して提示する⁹⁾。



第3図

P、P'を需要曲線の隣接する点とすると、そのとき、PP'はPにおける接線に相当する。そして、 $P'R/PM$ は、交易条件が OM/PM から $OM'/P'M'$ からごくわずかに変化することによる購入量の変化率を示す。このとき、価格変化 Δp は

9) Cf. Alfred Marshall, *Money Credit and Commerce*, Reprints of Economic Classics. New York : Augustus M. Kelley, Bookseller, 1965. p. 337. 邦訳、永澤越郎訳、マーシャル『貨幣信用貿易』、第二分冊、東京：岩波ブックサービスセンター、昭. 63. p. 141-42, 参照。

$$\begin{aligned}\Delta p &= \frac{OM}{PM} - \frac{OM'}{P'M'} = \frac{OM}{PM} - \frac{OM+MM'}{PM+P'R} = \frac{OM(PM+P'R) - PM(OM+MM')}{PM(PM+P'R)} \\ &= \frac{OM \cdot P'R - PM \cdot MM'}{PM^2} = \frac{(OM - TM) P'R}{PM^2} = \frac{P'R \cdot OT}{PM^2}\end{aligned}$$

となる。なぜなら、相似三角形より

$$\frac{MM'}{P'R} = \frac{TM}{PM}$$

つまり、

$$MM' \cdot PM = TM \cdot P'R$$

であるからである。

それゆえ、価格変化率 $\frac{\Delta p}{p}$ は、

$$\frac{\Delta p}{p} = \frac{P'R \cdot OT}{PM^2} \div \frac{OM}{PM} = \frac{P'R \cdot OT}{OM \cdot PM}$$

となり、需要の価格弾力性 e は、

$$e = \frac{\frac{\Delta D}{D}}{\frac{\Delta p}{p}} = \frac{P'R}{PM} \div \frac{P'R \cdot OT}{OM \cdot PM} = \frac{OM}{OT}$$

となる。

このマーシャルの証明に基づけば、

- (1) $OM/OT > 1$: 弾力的な需要
- (2) $OM/OT = 1$: 弾力性 1
- (3) $OM/OT < 1$: 非弾力的な需要

となり、需要の価格弾力性に基づいて、相互需要説における 3つの需要曲線が描かれる。

ミルは『経済学原理』第3版(1852)で国際価値論に追加した諸節において、第4図に示されるように、マーシャル的な需要の価格弾力性に基づく3種の需要曲線による交易条件の変化を分析している。ここでの需要の価格弾力性とその概要を以下に提示しておく¹⁰⁾。

(1) $e > 1$ のケース

イギリスの需要曲線は OeE_1 のように描かれ、ドイツの需要曲線は OgG_1 のように描かれる。交易条件は2国の需要曲線の交点 E_1 で決定される。

一般に相互需要説として描かれる図形は、この形状の需要曲線である。

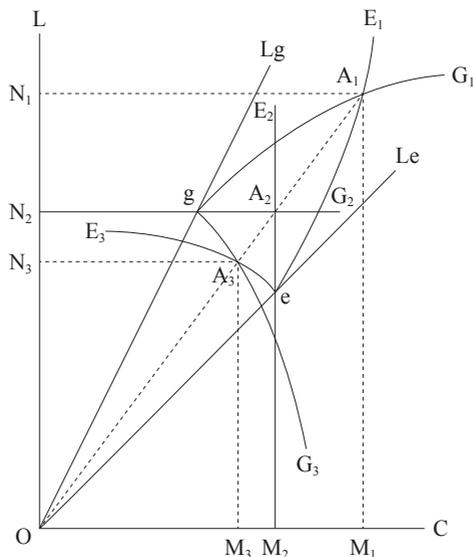
(2) $e = 1$ ケース

需要の価格弾力性が1の場合、イギリスは OM_2 のラシャを生産し、そのまま供給するので、横軸 OC に垂直な直線 M_2E_2 がイギリスの需要曲線となる。これに対してドイツは、 ON_2 のリンネルを生産し、そのまま供給するので、縦軸 OL に垂直な直線 N_2G_2 がドイツの需要曲線となる。そして、交易条件は2国の需要曲線が交わる点 A_2 で決定される。

(3) $e < 1$ のケース

イギリスの需要曲線が OeE_3 のように点 e から左上方へ屈折する形状を示す場合が、弾力性が1より小さい需要曲線である。ドイツの需要曲線でいえば、 OgG_3 のように点 g から右下方に屈折した需要曲線がそうである。この場合、交易条件は2国の需要曲線が交わる点 A_3 で決定される。

10) ミルの『原理』第3版での追加諸節での議論は、貿易によって解放される資本を新要素として展開された供給面からのアプローチであったが、同時に需要の弾力性も提示されている。拙稿、「J.S.ミルの『経済学原理』第3版「国際価値論」新節の意味するもの」『大阪学院大学経済論集』, 第15巻第1号(2001年8月), pp. 82-85, 参照。



第4図

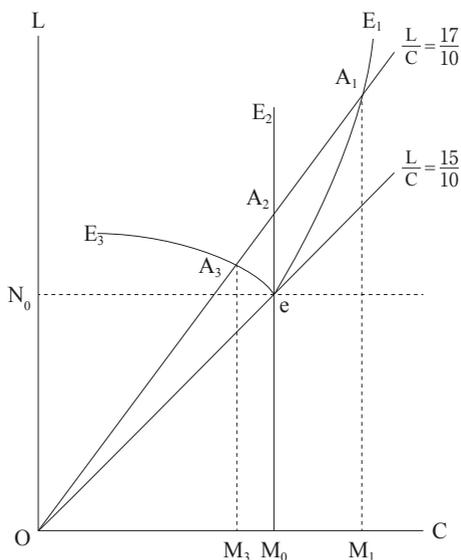
ここまでの分析が、マーシャルによる現代的な需要の価格弾力性の定義と、その視点からミルの相互需要説における需要曲線の分類を行ったものである。

それでは、ミルの考える需要の弾力性とはどのようなものであったのであろうか。リンネルの相対価格が低下した場合のイギリスの需要の変化に関して、ミルは、「イギリスにおけるリンネルに対する需要が増加することは、ほとんど間違いのないことである。しかし、それは、低廉化に比例して増加することもあり、また低廉化よりも大きい割合をもって増加することもあり、あるいはまた低廉化よりも小さい割合をもって増加することもありうる。」¹¹⁾と述べる。

この内容を図形的に表すと、第5図のようになる。第5図において、初期状態では、交換比率が $L/C = 15/10$ のとき、イギリスのリンネルの需要量は eM_0 である。この状態からリンネルの相対価格が低下し、交換比率が $L/C = 15/10$

11) Mill, Principles, p. 606. 邦訳, 第3分冊, p. 298.

から $L/C = 17/10$ になったとする。このとき、「イギリスのリンネルの需要量は増加する」のであるから、需要量は eM_0 もしくは ON_0 よりも大きくならなければならない。問題となるのは、需要量の増加の程度であり、それに応じて、需要曲線が3つのパターンに分類されるのである。以下、需要の価格弾力性に基づいて、3つのパターンを整理してみる。



第5図

(1) $e > 1$ のケース

ミルの表現では、価格の低下よりも大きい割合で需要量が増加するのであるから、需要量は A_1M_1 となり、需要曲線 OeE_1 のように描かれる。

(2) $e = 1$ のケース

価格の低下と同じ割合で需要量が増加し、需要量は A_2M_0 であり、需要曲

線 OeE_2 のように描かれる。

(3) $e < 1$ のケース

価格の低下よりも小さい割合で需要量が増加し、需要量は A_3M_3 となり、需要曲線 OeE_3 のようになる。

ミルは、交易条件は「諸外国の商品に対するその国の需要と比較した場合における、その国の諸商品に対する諸外国の需要の大きさおよび伸縮性」¹²⁾ に依存すると述べる。ここで言う「需要の大きさ」とは eM_0 の大きさであり、「需要の伸縮性」とは、上記の3つのパターンの需要量の変化のことを意味しているのである。

以上がミルの説明に基づく需要の弾力性であるが、もう一点、注意を払っておくべきことがある。それは、需要の価格弾力性が1のケースに関して、次のように述べていることである。

もしも低廉化と同じ割合において需要が増加したとすれば…、イギリスは、以前とまさしく同じ分量のラシャを、あるいは同じ分量のラシャの等価を、簡単にいえばイギリス国民の総所得の同じ分量を、リンネルに対して支出するであろう¹³⁾。(下線部は筆者による。)

ここでミルは、リンネルの相対価格の低下による需要量の変化に加えて、横軸に表示されたイギリスのラシャの供給量の変化に注目し、それをイギリスの支出の変化と把握して分類しているのである。つまり、以下のようになる。

- (1) $e > 1$: 支出は OM_0 から OM_1 に増加
- (2) $e = 1$: 支出は OM_0 で一定

12) *Ibid.* p. 614. 邦訳, 同上, p.315.

13) *Ibid.* p. 606. 邦訳, 同上, pp. 298-99.

(3) $e < 1$: 支出は OM_0 から OM_3 に減少

以上の考察から、相互需要説においても、価格が低下したときに需要量が増加するが、支出額の変化についても、「一定」、「増加」、「減少」であるかにしたがって、需要の分類がなされているのである。

このように、ミルの需給論と相互需要説に共通する特徴として、支出額の変化に基づいた需要の弾力性という分析的視点を見出せるのである。

IV. 結語

ミルの需要の弾力性は、現代的な意味での需要の価格弾力性の認識には至っていなかった。しかしながら、需要曲線を支出額の変化に応じて3つに分類し、それを応用するレベルにまで達している。ミルが需要の弾力性に基づいて分析を行った事例としては、貿易利益の測定と複数均衡の問題がある。

貿易利益の測定は、相互需要説に基づく。ミルは、生産上の改良によって貿易相手国の需要曲線がシフトした場合、弾力性の異なる3つの需要曲線に応じて、貿易利益が異なってくることを示し、同時に、相手国の生産量の増加が、輸入を通じて自国にとっても利益となることを説こうとしている¹⁴⁾。

複数均衡の問題は、相互需要説と需給論の両理論に共通する問題である。相互需要説では、2国の需要曲線が非弾力的である時に、2国の需要曲線が完全に重なり、複数均衡が生じる可能性がある。同様に、需給論では、需要曲線と供給曲線が垂直部分で完全に重なり、やはり複数均衡の問題として現れる。ミルにとって、複数均衡の問題は、需給論が適用できない例外的なケースであ

14) 図形分析と共に、以下で詳述してある。拙稿、「J.S.ミル相互需要説をめぐる諸問題－W. ソートンとW. ヒューウェルの影響－」『経済学史学会年報』第33号（1995年10月），pp. 66-68, 参照.

り、その限界を明確にする有意義なものとして理解されている¹⁵⁾。

以上の分析より、ミルは、価格が上昇すれば需要量は減少し、逆に、価格が低下すれば需要量が増加するという基本的な需要の法則を認識している上に、需要量の変化によって支出がどのように変化するかという視点をもって需要の弾力性を認識し、経済分析に応用していたことが明確になったはずである。そして、ミル独自の需要の弾力性は、支出変化に着目するという点で、需給論、相互需要説に共通する特性をもっていたのである。

15) 複数均衡の問題については、ウィリアム・ソーントンによる需給論批判を受けてミルが問題視した現象を、図形的に論じた。同上, pp. 68-70, 参照。また、ミルにとって、複数均衡の問題が、需給論の限界を示す例として積極的な意味をもつことを、以下で検証した。拙稿, 「J.S. ミルの『経済学原理』第3版「国際価値論」新節の意味するもの」, pp. 87-90, 参照。

【参考文献目録】

単行本

- Marshall, Alfred. *Money Credit and Commerce*. Reprints of Economic Classics. New York : Augustus M. Kelley, Bookseller. 1965. 邦訳. 永澤越郎訳. マーシャル『貨幣信用貿易』. 全2冊. 東京 : 岩波ブックサービスセンター, 昭. 63.
- Mill, John Stuart *Essays on Some Unsettled Questions of Political economy (1844)*, Vol. IV of Collected Works of John Stuart Mill, Essays on Economics and Society by John Stuart Mill, 1824-1845. Introduction by Lord Robbins. Textual Editor, J. M. Robson. Toronto : University of Toronto Press; London : Routledge & Kegan Paul, 1965. 邦訳. 杉原四郎・山下重一 (編.) 『J.S. ミル初期著作集4』. 熊谷次郎・早坂忠・井上琢智訳. 「経済学試論集」. 東京 : 御茶の水書房. 1997.
- . *Principles of Political Economy, with Some of Their Application to Social Philosophy*. Vol. III of *Collected Works of John Stuart Mill*. Introduction by V. W. Bladen. Textual Editor, J. M. Robson. Toronto : University of Toronto Press; London : Routledge & Kegan Paul, 1965. 邦訳. 末永茂喜訳. 『経済学原理』. 全5冊. (岩波文庫.) 東京 : 岩波書店, 昭. 48.
- 森茂也. 『イギリス価格論史—古典派需給論の形成と展開—』. 東京 : 同文館, 昭. 57.
- Negushi Takashi, *History of Economic Theory*. North Holland, 1985.
- Schumpeter, Joseph A. *History of Economic Analysis*. 3d Printing. New York : Oxford University Press, 1959. 邦訳. 東畑精一・福岡正夫訳. 『経済分析の歴史』. 全3巻. 東京 : 岩波書店, 2005-2006.

論文

- Bradley, Michael E. "John Stuart Mill's Demand Curve," *History of Political Economy*, Vol. 21 (Spring 1989), pp. 43-56.
- 深貝保則. 「J.S. ミル『経済学原理』における価値論の舞台設定」『山形大学紀要』. 第15巻第1号 (昭和59年7月), pp. 1-31.
- 藤本正富. 「J.S. ミル相互需要説をめぐる諸問題—W. ソーントンとW. ヒューウェルの影響—」『経済学史学会年報』. 第33号 (1995年10月), pp. 65-78.
- . 「J. S. ミル『経済学原理』第3版「国際価値論」新節の意味するもの」『大阪学院大学経済論集』. 第15巻第1号 (2001年8月), pp. 69-90.

J. S. Mill's Recognition of the Elasticity of Demand in Theory of International Trade

Masatomi Fujimoto

ABSTRACT

Many economists have studied the position of J. S. Mill in the development of the modern theory of supply and demand, especially of the theory developed by Alfred Marshall. According to commonly accepted ideas, 'Mill came closer to Marshall's analysis of demand and the demand curve than did most of his contemporary British economists,' but he 'did not develop the notion of the demand function and its properties nearly as fully or clearly as Cournot or Dupuit had done a decade earlier.' However, there is no explicit reference to Mill's recognition of elasticity of demand, just referred to his explanations which seem to be similar to modern theories.

In this paper, firstly, I will show two types of Mill's elasticity of demand by graphical methods, one on the theory of supply and demand in his *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy* (1844), and others on the theory of reciprocal demand in his *Principles of Political Economy* (1848). In both theories, Mill's elasticity of demand is not the same concept as price elasticity of demand in modern theory, but Mill sets the change of expenses as the standard of deciding the elasticity, and makes 3 types of elasticity which are fixed, increased or decreased expenses when the price changes.

Secondly I will show Mill's application of elasticity of demand to the

equilibrium analysis which a unique equilibrium cannot be determined, in the New Additional Sections to 'On international Value' in the third edition of the *Principles* (1852) and in "Thornton on Labour and its Claims (1869)."

Mill's recognition is not complete as compared with modern meaning of the price elasticity of demand, but he applies his original elasticity of demand to the analysis of some equilibrium problems.

Keywords : J.S.Mill; elasticity of demand; reciprocal demand;
supply and demand

JEL Classification Number : B12.